



TITLE:

水俣市に『知の拠点』を --水俣環境アカデミア-- : 水俣市 総合政策部
水俣環境アカデミア 古賀実氏、田
上朋史氏 <特集 : 民主主義>

AUTHOR(S):

古賀, 実; 田上, 朋史

CITATION:

古賀, 実 ...[et al]. 水俣市に『知の拠点』を --水俣環境アカデミア-- : 水俣市 総合政策部 水俣環境アカデミア 古賀実氏、田上朋史氏 <特集 : 民主主義>. 公共空間 : 公共政策・実務の最前線を届ける情報誌 2017, 16: 13-16

ISSUE DATE:

2017

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/234571>

RIGHT:

本誌掲載の写真・イラスト・記事の無断転載・二次利用はお控えください。

水俣市に「知の拠点」を ―水俣環境アカデミア―

水俣市 総合政策部 水俣環境アカデミア

古賀実氏 田上朋史氏

「水俣病」と聞いたとき、頭に浮かぶイメージはどんなものだろう。水俣病に苦しむ患者の姿だろうか。それとも、有機水銀を含む排水を行っている工場の姿だろうか。いずれにせよ、私たちが水俣病に抱く印象は、決して前向きなものではない。

水俣市は、長く苦しんできた。水産業の衰退、水俣病患者への補償問題、水俣病を通じて発生した市民同士の対立。人と人との繋がり、人と自然との繋がりには破壊されてしまった。水俣市にとって、水俣病はマイナスの遺産だった。

しかし水俣市は、水俣病から目をそらさなかった。水俣病に、新しいプラスの価値を見出そうとする動きが起こってきた。マイナスの遺産として捉えられてきた水俣病を、プラスの価値を持つものとして価値転換を試みる。そんなまちづくりが、一九九〇年代初頭から始まった。

水俣病を教訓に、水俣市独自のまちづくりを進めていく。一九九二年の環境モデル都市作り宣言に始まるこの方針は、その後、形を変えながら一貫して継続されている。

二〇一六年には、水俣市の「知の拠点」とし

て、「水俣環境アカデミア」が開設された。水俣環境アカデミア（以下、アカデミアと表記）は、環境対策技術の開発、普及に関する情報発信拠点として、また、環境管理施策、行政施策を学ぶ場にとどまらず、限られた地域資源の中で多くの人々が交流を通じ、知恵や知識を出し合い、それぞれの個性や強みを活用し協働していくことを目指している。今回は、アカデミアの所長を務める古賀実氏と、水俣市総合政策部でアカデミアを担当する田上朋史氏にインタビューを行い、アカデミアの沿革、そして今後の見通しについて伺った。

よろしく願います。本日はアカデミアについて広くお話を伺いたいと考えています。ではまず、アカデミアの概要について聞かせていただけますか。

古賀…よろしく願います。水俣環境アカデミアは、二〇一六年四月三〇日に開設し、一五〇〇人を超える大学生、大学院生などに来校頂いております。アカデミアでは、水俣病

というテーマを中心に、歴史的な背景や現在の取組み、あるいは将来にわたる様々な試みについて学びを提供しています。

田上…機関としては、水俣市役所の総合政策部というところに属しています。水俣環境アカデミアは市の一機関ということになります。

古賀…アカデミアとしては、「持続可能な社会」というところに重点を置いています。

国連の掲げる持続可能な開発目標、Sustainable Development Goals というものがあります。これにより、従来は開発途上国に限定されていた目標を、先進国でも設定するようにになりました。各国は二〇三〇年までにそれぞれのゴールに向かって努力している、ということなんです。現在、産業界であつても、教育界であつても、持続可能という言葉がひとつのキーワードとなっています。こうした流れを受けて、アカデミアでは「持続可能な社会」を担う存在でありたいと考えています。



古賀実氏

水俣市で「環境」というと、どうしても水俣病との関わりが避けられないように思います。

古賀…水俣病は公式確認から六〇年が経過しましたが、まだまだ苦しんでいる患者さんや被害者の方々がいらつしやいます。六〇年という期間は、患者さんたちに限ったものではありません。この期間、国全体では、産業界などで新たな設備投資を行ってきた、挑戦を行ってきたわけです。しかしその間、水俣地域は、補償で手一杯という状況でした。かつて水俣市の人口は五万人を超え、南九州では大きな地域でしたが、現在では半減してしまいました。

元々、水俣市には、山や海、素晴らしい自

然環境があるのです。水俣病のもたらした状況に苦しみながらも、それをもっと活用できないか、という動きが、人びとの間に現れてきました。その取組みの中で生まれてきたのが、「もやい」という言葉です。

あまり聴き慣れない言葉ですが、「もやい」にはどのような意味があるのですか？

古賀…「もやい」という言葉は、地元の人びと以外には伝わりにくいかもしれませんね。「船と船をつなぐ」ですとか、「人と人をつなぐ」という意味があります。

水俣病は、ある日突然水俣病患者を生み出し、巨額な補償金の支払いを生み出しました。これによって水俣地域は分断されてしまったのです。水俣病は、地域の人と人とのつながり、人と自然環境との共生社会を壊してしまいました。

この状況に関して、もう一度「もやい」を考え直そう、という考え方が現れてきました。これが「もやい直し」です。

しかし、「もやい直し」にも色々課題が生じているのが現状です。「もやい直し直し」が何度も生じています。

「もやい直し」に見られる、市民の繋がりを通じて水俣病と向き合う流れが、アカデミアの構想へと繋がったのでしょうか。

古賀…実は、「もやい直し」が提唱されるよりも前から、そうした構想はありました。環境で壊れた地域を立て直すために、環境の大学、あるいは大学院を誘致しようとしていたのです。

田上…水俣市は、従来から行っていた施策を評価され、二〇〇八年に国から環境モデル都市としての指定を受けました。この頃から環境大学、環境大学院を求める動きが再燃しました。

古賀…実際に基金も設立し、お金も集めました。ただ、大学や大学院の誘致というものは簡単にできるものではありません。ごく最近まで、環境大学院構想という形で議論されてきました。ですが結果的には、少子化の流れの中で大学院を作るのは難しい、ということになりました。

それでも、研修や学修、知の拠点となる施設が求められていました。そこで、アカデミアの構想が生まれたわけです。

なるほど、そうした経緯を経てアカデミアが設立されたんですね。では、アカデミアの役割として、どのようなものを想定されているのでしょうか？

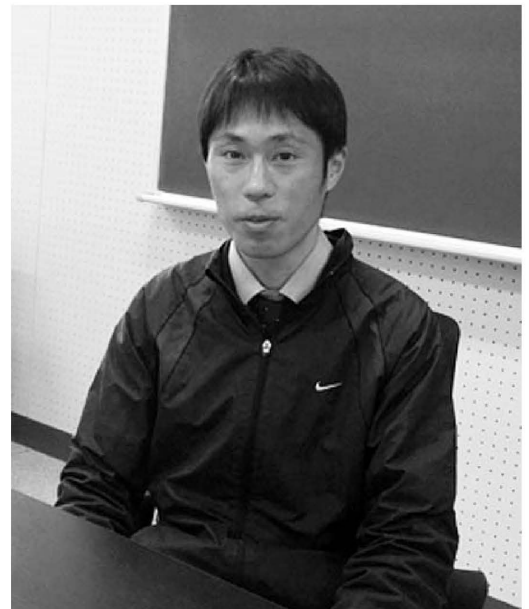
古賀…アカデミアには、水俣病の教訓を次の世代に伝えていく役割があると考えています。水俣病がこの土地で起こったのはなぜか、水俣病の拡大を防げなかったのはなぜなのか。水俣市が体験した色々な物事を、教訓として残していかなければなりません。

そのためにも、現在は資料収集に力を入れています。水俣市役所、議会の事務局などに、水俣病に関連する様々な記事や文章が残されています。アカデミアにはまだスペースが余っているのです、食欲に、あらゆる資料を収集し、集積を図っているところです。

アカデミアは、水俣病の記憶を後世に伝えていく存在という理解でよろしいでしょうか？

古賀…そうです。それに加えて、国際社会に向けて発信する役割があると考えています。この国際社会の中で、有機水銀の毒性というものを伝えていかなければなりません。

二〇一三年には水銀に関する水俣条約が締



田上朋史氏

結されました。熊本市内や水俣市内でも会議が持たれました。発効には五〇ヶ国の批准が必要ですが、批准国は増加しつつあり、もうそろそろ発効するのではと見ています。国際的に見て、水銀の削減、水銀フリー社会への取組みは進んでいます。

アカデミアにおいても、国際的な取組みは進んでいるのですか？

古賀…二〇一六年の十一月から十二月にかけてワークショップを開催しました。アジア太平洋地域で水銀が発生する過程をモニタリングするネットワークづくりに協力できればと考えています。

独自の事業として現在考えているのは、科学技術振興機構が行っているさくらサイエンスプランの一環として、水俣市を見てもらいたいと思っています。このプログラムは、海外から優秀な若者を日本に招聘して、一週間程度の研修プログラムを提供するものです。主に日本の優れた科学技術の紹介などを行います。水俣市の科学技術や水産関係を、環境と結びつけて紹介したいと考えています。例えば、多角化に挑戦するJNCのトマト栽培や液晶製造を見せられる限りお見せしてもらいたい。あるいは、かつて汚れていた水俣の海は、今こんなにも綺麗になっているのだ、というところを見てもらいたいなと思っています。

アカデミアの課題や、今後の方向性などあれば教えてください。

古賀…まずは研究能力の向上ですね。ある程度の研究能力がアカデミアに備わっていないと、水俣市にとって何が新しく、何が地域の課題になるのかを判断できません。アカデミアは、将来をも見通す必要があります。そのために研究能力を高める必要があると感じています。

そのためにも、財政的な基盤が大切なところですね。これから、外部からの研究資金などを積み重ねて、アカデミアとしての実績を作っていくことになります。研究施設としての評価を頂いて、JSTや学術振興会から、研究費を提供していただけたところに持ってきたいですね。少しずつ、一步一步進んでいくということです。

研究施設としての価値を得ることが、アカデミアの課題であり、方向性ですね。最後に、アカデミアへの思いを語っていただいてもよろしいですか。

古賀…今のところ、多くの人びとがアカデミア

を訪れてくださっています。全国の大学の先生、学生、若者の皆さまにきていただくのは大歓迎です。産学官民を有機的に、人と人とを繋げていきたいですね。長期的には、水俣病発生地域の環境価値の向上、それから地域経済産業基盤の強化、というところまで結びつけたいと考えています。

そのためにも、アカデミアは、単なる公民館のような存在であってはならない、と強く感じています。人びとが多く集まって、語り合うことから、新しいものを生み出す力。教育にとどまらず、能動的に活動を行っている人びとに話を聞ける、繋がりを生む場として、アカデミアを考えています。

ありがとうございました。

古賀・田上…ありがとうございました。

この後、田上氏の案内で、水俣環境アカデミアの施設を案内していただいた。旧水俣高校の施設を改装して作られた設備はどれも綺麗だった。広々とした大教室には、国内外から多くの学生が訪れ、活発な議論を交わしているという。知の拠点として活動する水俣環境アカデミアを歩きながら、水俣市に「もやい」が再生する未来を想った。

（取材…一月二五日・文責：堺峻平）